

# 莊園制と悪党

高橋典幸

The Shoen System and Akuto

はじめに

- ① 莊園領主権の変動と悪党
- ② 在地の対立競争状況と悪党
- ③ 莊家警固の構造
- ④ 莊園制の中の悪党  
むすび

## 〔論文要旨〕

室町期・中世後期の莊園制を見通した場合、転換期として南北朝期が重視され、「一円化」をキーワードとする変質が指摘されてきた。ところで、鎌倉後半～南北朝期にはこうした莊園制の変質とともに、「悪党」の活躍も知られるが、近年は莊園制の変質（より厳密に言えば莊園政策の変質）が「悪党」の出現をもたらしたとする見解も提示されている。こうした考え方に立てば、「悪党」そのものの分析からその背景にある莊園制変質の内実に向き合うことになる。そこで、本稿では播磨国矢野莊を素材として、そこに現れる「悪党」を分析して南北朝期莊園制の特質を浮き彫りにすることを試みた。まず、現象として指摘すべきは莊園領主権の変動や動揺（具体的には領主の交替や領主どうしの権力争い）にともなう悪党の活動が見られるということである。次に在地における悪党活動に目を向けると、莊園現地の沙汰人や名主・百姓が相互に対立している状況が浮かび上がってくる。このような在地の対立・競争状況は

莊園制に通時代的に認められるものであるが、これが莊園領主権の動揺・変動と結びつくことよって悪党が出現したと考えられる。先行研究によれば、莊園領主権の変動や動揺は鎌倉後半から南北朝期に構造的な現象であったとされるので、悪党の活動がこの時期に集中することになる。

こうした悪党に対して、莊園領主と莊園現地の莊家が直結する「一円化」することにより、莊園制は中世後期に転成していったと考えられているが、莊家警固の構造を分析すると、こうした「一円化」では説明しきれない要素が存在していることに気がつく。それらは、莊園制を危機に陥れた「悪党」と同質の存在と考えられ、南北朝期莊園制はこうした「悪党」状況を内にも含みこむものに変質したと考えるべきであろう。このように考えると、中世後期の莊園制は「一円化」ばかりでなく、その周囲に存在する多様な人々の再配置の問題としても捉え直さなければならぬであろう。